

未来 届ける 日光



D e l i v e r t o t h e f u t u r e

改訂版

栃木県日光市

「日光の社寺」は

なぜ世界遺産に登録されたのか？

そして
守り続けねば
ならない理由
とは？



世界遺産

「日光の社寺」とは？

「日光の社寺」とは、「日光二荒山神社・日光東照宮・日光山輪王寺（一社一寺）」のことを指し、江戸時代から残された多くの建造物群と、鎌倉時代にさかのぼるものを含む杉木立に囲まれた境内地から成ります。

世界遺産の構成資産となるのは、これら二社一寺の文化財建造物で、東照宮陽明門に代表される国宝9件、重要文化財94件の計103件に及びます。そして、約50ヘクタールの境内地は「日光山内」として国の史跡に指定されています。

また、弥生祭や千人武者行列、強飯式など社寺に伝わるさまざまな祭礼行事も世界遺産に深く関わるものとして評価されています。

そもそも 世界遺産って何？

世界遺産とは、1972（昭和47）年にユネスコ総会で採択された「世界遺産条約」に基づき、世界遺産一覧表に記載された遺跡や景観ならびに自然のことです。この条約は人類全体の遺産を保護・保存するた

め、国際的な協力をすることを目的に定められたものです。このため、「世界遺産」は国や人種・世代・信仰を問わず、人類すべての共通の財産といえます。

世界遺産条約設立当時、日本はこの条約に参加していませんでした。なぜなら、日本では文化財保護法等による非常に厳しい保護がすでに実施されており、加盟の必要はないと考えられていたからです。しかし、その後の世界的な文化財保護の流れの中で、日本も条約を調印すべきではないかという動きが起り、国会の承認を経て1992（平成4）年に加盟しました。

日本政府は、この時に今後の世界遺産の候補（暫定一覧表）を発表しました。これは、「世界遺産は事前にその候補を示さなければ審議されない」という決まりがあるためで、「日光の社寺」はこの日本最初の暫定一覧表に他の9件の候補とともに掲載されました。

どうして「日光の社寺」 は世界遺産に登録 されたの？

世界遺産にはそれぞれ明確なテーマがあり、それは世界で唯一無二のものでなければなりません。このため、世界遺産には同じような価値を持つものは登録されません。「日光の社寺」は、法隆寺（寺院）、厳島神社（神社）と並び日本を代表する宗教建築物であ

り、神仏習合の姿をとどめていることから、最初の候補（暫定一覧表）に挙げられました。

「神仏習合」は日本古来の神道と6世紀に伝わった仏教を区別せず、体のものとして信仰することです。現代では神と仏は別のものとして信仰されることが多いですが、江戸時代までの日本において神仏習合はごく普通の考え方でした。「日光の社寺」は、この神仏習合の要素が良く残っている場所なのです。

その後、「日光の社寺」は1999（平成11）年、創造的才能を表す傑作ともいえる社寺建造物群や周囲の自然景観との調和が高く評価され、日本で10番目の世界文化遺産に登録されました。

世界遺産を後世に 伝えていくために…

世界遺産登録の重要な条件の一つに、「完全性」と「真正性」が挙げられます。これは、世界遺産は模造や複製品ではなく、本物でなければならないということです。「日光の社寺」の建造物の大部分は木造であり、その姿を保つため、これまでに幾度も修理を繰り返してきました。文化財建造物の保存とは、単に傷んだ部分を修理すればよいという話ではなく、そこに用いられている材料や技術も併せて伝えていくことも重要となっています。

現在、「日光の社寺」建造物の修理は、専門職員がいる「公益財団法人日光社寺文化財保存会」が実施しています。世界遺産の構成要素である建造物群は103棟にも及ぶため、計画に基づき常にいずれかの建造物の修理が行われています。「日光の社寺」が現代に至るまで美しい姿を保ってきたことは、確立された修理体制や技術の高さに裏打ちされるものであり、このことが世界遺産としての「完全性」「真正性」の条件を満たしているといえるのです。

世界遺産としての日光の社寺の評価には、建造物群だけでなく、それを取りまく境内地の自然も含まれます。市はその環境の変化を計測する各種モニタリング調査を継続して行っており、大気汚染の原因物質の調査については「日光ユネスコ協会」の協力を得て実施しています。観光客が増加する夏休み中の調査には市内の高校生も参加し、世界遺産に身近に接することで、「世界の宝」を未来に伝えていくことの大切さへの理解を深める取組をしています。

世界遺産は登録が終点ではなく、今後の保全や未来への継承が非常に重要です。保全状態が悪ければ登録を取り消されることもあります。このように、「日光の社寺」は多くの人々の努力により現在までその姿を保ち続けています。今後とも貴重な文化財を後世に伝えていくためには、若い世代の理解や関心を高め、伝統や技術を継承していくことが重要なことなのです。

世界遺産

世界遺産条約は1972年にユネスコで採択され、2024年10月現在、195か国が締結しています。日本も1992年にこの条約を締結し、文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界の遺産として、損傷、破壊等の脅威から保護し、保存することが重要であると考え、国際的な協力・援助体制の構築に貢献してきました。

各国は、国際的な観点から価値があると考える自国の遺産を推薦し、諮問機関による学術的な審査を経て21か国で構成される世界遺産委員会において価値や保存管理体制が認められれば登録が決定されます。2024年10月現在、世界遺産は文化遺産952件、自然遺産231件、複合遺産40件を含む1,223件に上り、そのうち日本からは文化遺産21件、自然遺産5件の計26件の世界遺産が登録されています。

推薦資産(コアゾーン) ※1

登録推薦資産を効果的に保護するために明確に設定された境界線です。

境界線の設定は、資産の顕著な普遍的価値及び完全性または真正性が十分に表現されることを保証するように行わなければならないとされています。

緩衝地帯(バッファゾーン) ※2

推薦資産の効果的な保護を目的として、推薦資産を取り囲む地域に、法的又は慣習的手法により補完的な利用・開発規制を敷くことにより設けられるもうひとつの保護の網です。推薦資産の直接のセッティング、重要な景色やその他資産の保護を支える重要な機能をもつ地域又は特性が含まれるべきであるとされています。

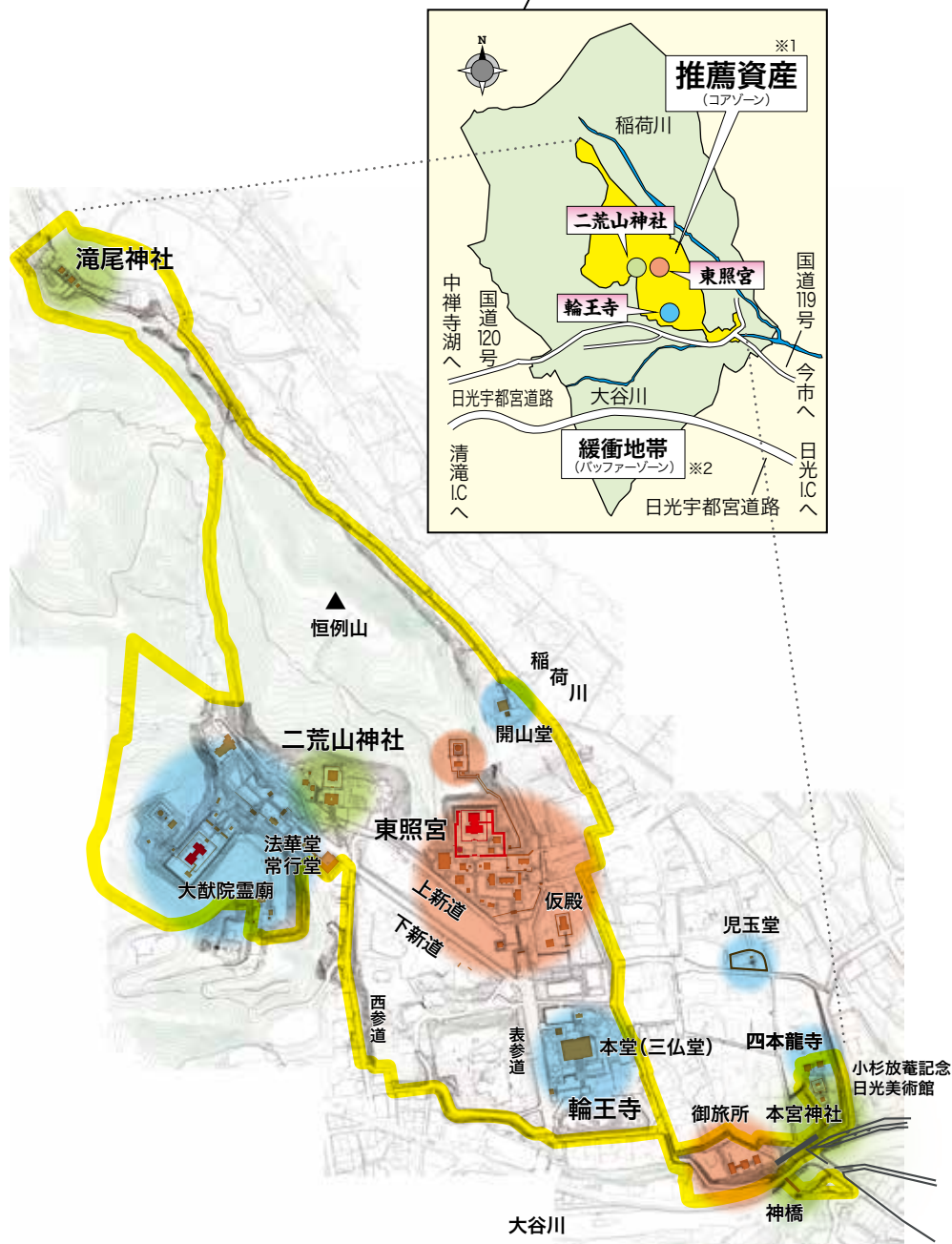
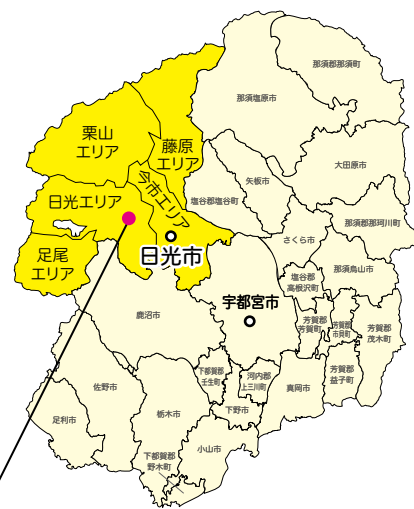


文化庁
文化財の紹介
世界遺産

世界遺産 「日光の社寺」の範囲

World Heritage:
Shrines and Temples of Nikko

日光二荒山神社、日光東照宮、日光山輪王寺、
そして遺跡(文化的景観)



日光二荒山神社

日光山輪王寺

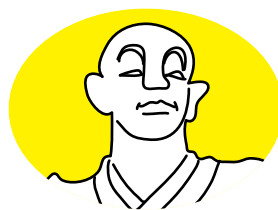
日光東照宮

「日光の社寺」

が

世界遺産に登録されるまで

私たちの
「世界の宝」、
日光の歴史を
知ろう！



はじめりは
勝道上人と
山岳信仰



信仰の聖地
「日光山」と
天海大僧正



明治期以降
の危機を
乗り越えて



日本では、昔から山そのものを神として崇拝してきました。やがて大陸から仏教が伝わると、神と仏は一体的なものとして敬われるようになります。そして、山頂に至ることが修行であると考えられるようになり、各地の山が開かれていきました。

日光連山の中心である「男体山」は、県内の広い範囲から望むことができます。奈良時代の766(天平神護2)年、芳賀郡出身の僧である勝道上人は男体山の絶頂を目指し、大谷川と稲荷川の合流する山裾にベースキャンプを設営します。この場所が後に輪王寺の前身である四本龍寺となります。これが「日光の社寺」のはじまりです。

勝道上人は782(天応2)年、三度目の挑戦で男体山の山頂に至ります。そこで見たものは、周囲に果てしなく広がる山々と光輝く中禅寺湖が一体となった絶景でした。やがて日光は多くの僧侶たちが集まる修行の場となり、神社や寺院が建てられていきます。こうして日光は「日光山」と呼ばれる関東で一番の霊場として栄えていきました。

タイヘンだ！

信仰の聖地として栄えた日光山は、大きな領地と数百の僧坊を有する大社寺となります。しかし、戦国時代、豊臣秀吉に敵対した日光山は、所領の大部分を没収され衰退してしまいます。その後、徳川家康が天下統一を果たすと、側近である天海を日光に派遣し、衰退した日光山の再興を命じます。

1616(元和2)年に家康が亡くなると、遺言により一年後に二代將軍秀忠によって「東照社」が建立され、遺骸は日光に移されます。これには天海も大きく関わっています。天海は、家康、秀忠、家光の三代の將軍に仕えた僧で、日光山の最高責任者でもありました。当時の東照社は簡素な造りでしたが、家康の二十回忌にあたる1636(寛永13)年、三代將軍家光により、現在のような豪華絢爛な社殿に建て替えられました。また、1651(慶安4)年に亡くなった家光も、遺言により日光に葬られます。

日光山は徳川家康・家光を祀る聖地として、江戸時代を通じて手厚い保護を受けることになり、定期的な修理によって創建当時の状態を保ち続けることとなりました。

タイヘンだ！

明治時代に入ると、新政府は神道を国教とし、仏教と分離する政策「神仏分離」を進めます。これに伴い多くの寺院や仏像の破壊が起こります。日光での神仏分離令は1871(明治4)年に施行されましたが、社寺関係者等による政府への強い働きかけにより、三仏堂の二荒山神社境内から現在地への移転など、最小限の影響で済みました。また、この直前に起きた戊辰戦争では、戦火が日光に及ばぬよう、日光山の僧侶の嘆願や土佐藩の板垣退助の指示、旧幕府軍の大鳥圭介らによる日光山からの撤退があったことを忘れてはならないでしょう。

神仏分離令や戊辰戦争による大きな破壊は免れたものの、社寺の建物や環境は荒れていきます。これは、社寺建造物の定期的な修理が幕府の消滅によって途絶えたためです。明治政府には、これを維持していく財力はまだありませんでした。

この状況を救うため、当時の町民や旧幕府の関係者らによって1879(明治12)年に「保見会」が創設され、修理が再開されました。その後、「日光社寺修繕事務所」が組織され、社寺の修理を担当するようになりました。これは現在の「公益財団法人日光社寺文化財保存会」の前身です。

こうして幾度もの危機を乗り越えた日光の社寺は、日光社寺文化財保存会により、今後も継続的に修理が続けられていくことでしょう。



勝道上人は3回目のチャレンジで登頂した！
男体山

trivia1

日光東照宮の彫刻と虎の関係

日光東照宮の表門内側の屋根の下を見ると、虎の彫刻が並んでいることに気が付きます。また、拝殿正面の屋根の下にも二頭の虎の彫刻があります。このように、重要な箇所に虎が配置されているのは、家康が寅年生まれだったことからと考えられます。中には縞模様ではなくヒョウ柄の虎もありますが、江戸時代にはヒョウは虎のメスだと思われていたようです。

trivia3

「輪王寺」

という名前の建物は無い

実は「輪王寺」という名前の建物は存在しません。「輪王寺」は、日光山内の仏教施設の総称で、本堂に当たるのが「三仏堂」です。三仏堂は、東日本で一番大きな木造建築物としても知られています。また、徳川三代将軍の家光の霊廟である「大猷院」も輪王寺に属する建物です。

trivia5

二荒山神社のシンボル「神橋」の正体は二匹の蛇

奈良時代に日光開山の祖、勝道上人が大谷川のほとりに差し掛かったとき、あまりの速い流れに川を渡ることが出来ず神に念じたところ、首にドクロを吊るした恐ろしい姿の神が現れ、二匹の蛇を絡み合わせて橋として勝道を渡したという伝説が残っています。このとき、勝道が滑らないように蛇の背中から山管が生えたということから、神橋は別名「山管の蛇橋」とも呼ばれます。

trivia7

日光と宇都宮の「二荒山神社」読み方が違う

日光二荒山神社が「ふたらさんじんじゃ」であるのに対し、宇都宮二荒山神社は「ふたあやまじんじゃ」。読み方も違えば、祀っている祭神もそれぞれ違い、実は両社はまったく別の神社！他にも、「二荒山神社」は宗教法人登記上は、30社もあるのです。知っていましたか？



trivia2

眠り猫の彫刻の裏側には、「スズメ」の彫刻がある

日光東照宮の眠り猫は、三猿とともに有名な彫刻として知られています。眠り猫は奥社への参道入口、東回廊潜り門に掲げられていますが、門の裏側には竹林で遊ぶ2羽のスズメの彫刻が存在します。猫が眠っている平和な世の中だからこそ、スズメも安心して暮らせるという、天下泰平の願いが込められているのです。

trivia4

かつて輪王寺の三仏堂は、二荒山神社の隣にあった

明治時代に「神仏分離令」が発令されるまで、輪王寺の三仏堂は現在の二荒山神社拝殿の隣の位置に存在していました。現在の建物は、1645（正保2）年に三代将軍家光により造営されたのち、神仏分離令により1881（明治14）年に現在地に移築されました。

trivia6

日光山の神様と赤城山の神様中禅寺湖の取り合いで大喧嘩

日光には、日光山の神々が群馬県の赤城山の神々と中禅寺湖の所有をめぐる争いを繰り広げたという伝説が残されています。神話の舞台となった場所は、戦場ヶ原と呼ばれています。窮地に追い込まれた日光の神々の危機を救ったのが弓の名手「小野猿丸」です。猿丸は太郎山の神の息子と伝えられています。小野氏の系譜は社家として江戸時代初期まで二荒山神社に長く務め、そのことが伝説の下地となったと考えられています。

trivia8

日光杉並木、「ギネス世界記録」に登録されている

栃木県民なら、誰しも一度は通ったことのある、日光杉並木街道。日光街道・例幣使街道・会津西街道の3つの街道の両側に全長37km、1万本以上の杉の木がそびえ立つ並木道です。1992（平成4）年には「世界一長い並木道」としてギネスブックに認定され、特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受けています。

世界遺産日光

”人類の宝“ 世界遺産

1999(平成11)年12月2日、モロッコのマラケシュで開かれていた第23回世界遺産委員会で、「日光の社寺」の世界遺産登録が決定しました。その知らせが地元日光にもたらされると、日本時間の深夜だったにもかかわらず、登録を心待ちにしていた市内は、大きな喜びに沸きました。

1972(昭和47)年、第17回ユネスコ総会において「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約(通称・世界遺産条約)」が採択され、日本も1992(平成4)年に世界遺産条約の締結国となりました。世界遺産条約が生まれたのは、地球上に存在するさまざまな文化遺産や自然遺産を、特定の国や民族のものとしてだけでなく、世界のすべての人にとってかけがえのない「宝物」として保護していくという考え方からです。「日光の社寺」の世界遺産登録は、日本国内では10番目でした。

日光の社寺とは

登録の対象となった「日光の社寺」の内容は、日光山内にある二社一寺(日光二荒山神社、日光東照宮、日光山輪王寺)の国宝9棟、国指定重要文化財94棟の合わせて103棟の建造物群と、これらを取り巻く「遺跡(文化的景観)」です。面積は50・8ヘクタール。周辺には373・2ヘクタールの緩衝地帯が設けられました。

登録に際して以下の3点の基準において評価されました。

①人間の創造的才能を表す傑作であるもの

日光の建造物の多くは、17世紀の日本の代表的な天才的芸術家たちの作品群です。日本画の狩野探幽や大工棟梁の甲良豊後守宗広にその例を見ることができます。

②人類の歴史上の重要な段階を物語る建築物、あるいは景観を代表する優れた見本であること

東照宮の本社と輪王寺大猷院霊廟は、「権現造」という様式の代表的な例です。近世日本の神社や霊廟の建築の見本となり、多大な影響を与えました。また、建造物群は全体として周囲の景観と一体となつて配置され、日本を代表する宗教的建築群となっています。



東照宮は権現造の本社を中心に神社建築の精華といえる。



優美な八棟造の二荒山神社の本社。

日光の社寺の中で東照宮は徳川家康の神霊を祀る神社として、幕府から神領が寄進され、代々の將軍の社参、朝廷からの例幣使の派遣、朝鮮通信使参詣などが行われました。日光は、江戸時代の政治体制を支える重要な歴史的役割を担った場所といえます。また、これらを取り巻く自然環境は、山や森を神格化する日本独特の神道思想と密接に結びついています。

棟あります。中心となつているのは、本堂(三仏堂)の周辺と三代將軍家光の霊廟である大猷院です。大猷院では国宝の本殿・相の間・拝殿など22棟が登録されています。

日光発祥の地・四本龍寺の観音堂と三重塔、弘法大師が建立したとされる児玉堂、天海大僧正を祀る慈眼堂、勝道上人を祀る開山堂も登録されています。

日光二荒山神社で登録されている建造物は23棟で、すべて重要文化財です。神橋や本社などのほか境内末社に位置する朋友神社および日枝神社、大國殿や別宮の本宮神社と滝尾神社の主だった建物も登録されました。本宮神社と滝尾神社は、それぞれ登録地の東端と北端に位置しています。

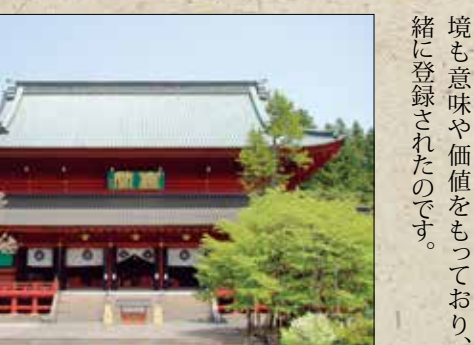
建造物群だけでなく、周辺の環境も意味や価値をもっており、一緒に登録されたのです。



世界遺産登録証
1999年第23回世界遺産委員会で登録が決定された。

日光東照宮は、国宝8棟と重要文化財34棟の合わせて42棟が世界遺産に登録されました。「権現造」の建築様式ほか、彫刻や彩色などの建築装飾についても、当時の最高水準の技術が用いられています。

日光二荒山神社で登録されている建造物は23棟で、すべて重要文化財です。神橋や本社などのほか境内末社に位置する朋友神社および日枝神社、大國殿や別宮の本宮神社と滝尾神社の主だった建物も登録されました。本宮神社と滝尾神社は、それぞれ登録地の東端と北端に位置しています。



輪王寺の三仏堂。木造建築では、東日本で最大を誇る。

【日光山輪王寺】
日光山輪王寺の登録建造物は38

【遺跡(文化的景観)】
文化的景観とは自然現象と人間の活動が影響し合つて形成された環境ともいふべきものです。世界遺産

神仏習合の聖地「日光」

文化遺産と自然との融合の歴史

日光の歴史は、勝道上人が男体山の登頂を決意し、大谷川を渡り、四本龍寺を創建したことに始まります。勝道上人は2度の失敗の末、悲願を達成し山頂に祠を作りまし。さらに中禅寺湖北岸に神宮寺(後の中禅寺)を建立するなどしました。

こうして日光は、高い山の神を崇めるとともに、その地を観音浄土とする考えが違和感なく共存する「神仏習合」のもと、信仰の聖地「日光山」として繁栄します。

戦国時代に豊臣秀吉によって日光山の領地の多くが没収され衰退しますが、江戸時代になり、徳川家康が日光山の領地を安堵すると、日光山貫主に任じられた天海大僧正はその再興に尽力します。

家康は「日光山に自分を祀ることにより、八州の鎮守となる」という遺言を残し、二代將軍秀忠は東照社を建立しました。三代將軍家光は、当時の芸術の粋を集めて絢爛豪華な社殿に造り替えました。これが世界に誇る現在の日光東照宮です。日光は東照宮が鎮座したことにより、その門前町として栄えました。その後、家光の霊廟として大猷院が建立されると、幕府のさらなる庇護を受け発展しました。

明治以降も、文化遺産と豊かな自然が融合する日光は、世界的な観光地として歩んできました。1999(平成11)年、「日光の社寺」は世界遺産に登録されました。



日光神領とは

江戸時代における日光山の領地をいい、東照宮領1万石と大猷院領3千6百石余とを指します。これらを総じて日光神領と呼ばれ、幕府によって管理されていました。

最終的な区域は現在の日光市域と同じくらいであり、総石高も2万5千石という大名並みの領地となりました。



■日光歴史年表

- 今なお残る雄大な自然は、神仏の住む地として崇められていた
- 766年 勝道上人四本龍寺創建(輪王寺の起源)
- 782年 勝道上人男体山初登頂
- 山頂に神祇を祀る(二荒山神社奥宮)
- 817年 勝道上人入寂
- 天下統一を成し遂げた將軍家康は、平和を願い、この地から日本を守る神になりたいと願った
- 1616年 徳川家康薨去
- 1617年 二代將軍秀忠、東照社竣工(東照宮の起源)
- 1634年 久能山から日光に遷座
- 1634年 三代將軍家光による東照社の大造替工事始まる(寛永の大造替)
- 1636年 東照社の大造替完了
- 1645年 東照社に宮号宣下され、東照宮と改める。
- 1651年 徳川家光薨去
- 1652年 四代將軍家綱、大猷院廟の造営に着手
- 1653年 大猷院廟竣工
- 自然と人の叡智がつくりあげた宝物を守る
- 1934年 日光・奥鬼怒地域が日光国立公園に指定される。
- 1950年 那須甲子・塩原、藤原、栗山、足尾の四地域が日光国立公園に追加される。
- 1999年 「日光の社寺」が世界遺産に登録される。
- 2005年 戦場ヶ原などの「奥日光の湿原」がラムサール条約湿原として登録される。
- 至高の日光を未来へ届けるために
- 2007年 東照宮、輪王寺および二荒山神社にて平成の大修理が始まる。
- 2009年 世界遺産登録10周年
- 2012年 男体山開山1230年祭
- (二荒山神社中宮祠)
- 2015年 東照宮400年祭(東照宮)
- 2016年 家康鎮座400年(東照宮)
- 日光山開山1250年(輪王寺)
- 2019年 平成の大修理完了
- 世界遺産登録20周年
- 第6回世界遺産サミットin日光
- 2024年 世界遺産登録25周年

二社一寺

空から見る世界遺産

（うつつそうとした森に深い歴史が息づく）



【日光東照宮】

日光東照宮は徳川家康の遺言に基づき、二代将軍秀忠により「東照社」として1617(元和3)年に建立されました。家康は江戸からほぼ真北の位置にある日光の地から、世の平和を見守ることを願ったのです。家康を敬慕してやまない三代将軍家光は、1年5ヶ月の期間をかけ、延べ454万人の人員を投入して「寛永の大造替」を行い、絢爛豪華な建物に建て替えました。現在残っている建造物の多くはこの時に造営されたものです。精巧な彫刻に彩られた国宝の陽明門や本殿・石の間・拝殿など、随所に当時の最高水準の技術が用いられています。



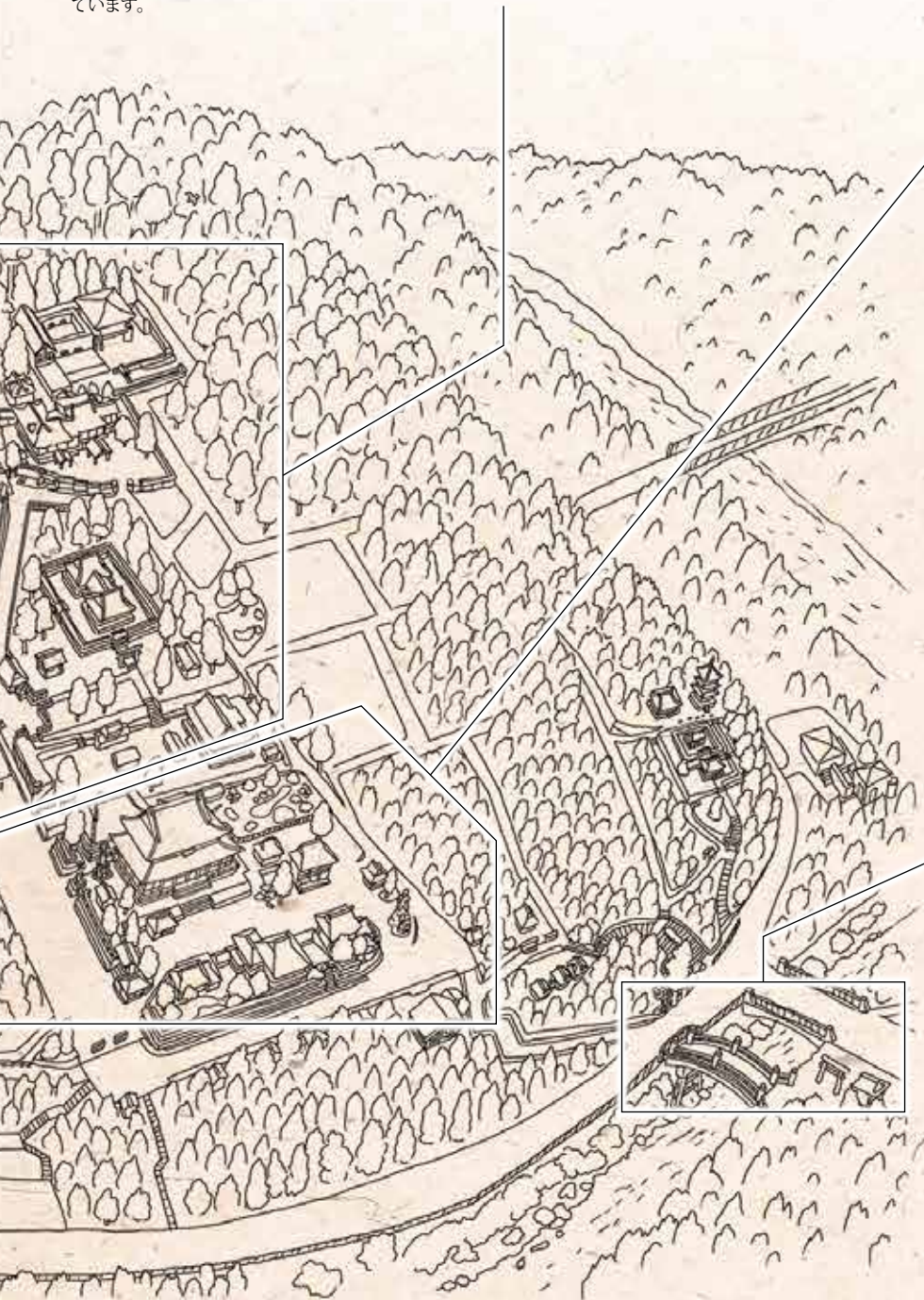
【日光山輪王寺】

日光を開いた祖、勝道上人が766年に創建した四本龍寺を起源としています。平安時代には、坂上田村麻呂・弘法大師・慈覚大師等の来山があり、山岳信仰の霊場として知られました。鎌倉期には仁澄法親王が座主に就任しました。これが、当山の皇族座主の初めであり、鎌倉将軍家の信仰と当時の隆盛が窺えます。その後、豊臣秀吉による所領没収などにより衰退しますが、徳川将軍家の信任の厚い天海大僧正が貫主となると、三代将軍家光の逝去の後に霊廟大猷院が建立されました。また、皇族から座主を迎え「輪王寺宮」と呼ばれ比叡山・東叡山・日光山を兼帯するに至りました。明治を迎えると「神仏分離」により二社一寺に分かれてしまいましたが、巴快寛・落合源七を代表とした市民運動により、神仏習合の姿を多く残し現在にいたります。



【神橋】

日光を開くため大谷川を渡ろうとしていた勝道上人が、激流に阻まれて難儀していたところ、深沙王の放った2匹の蛇が橋となって渡ることができたという伝説が残っています。朱塗の美しい橋で国の重要文化財に指定されています。また山口県錦帯橋、山梨県猿橋とともに、日本三大奇橋の1つに数えられています。





登録資産および緩衝地帯

登録資産の範囲は、日光山内にある二社一寺およびこれらの建造物群を取り巻く「遺跡」です。

登録遺産の周辺には、それを取り巻く環境や雰囲気をも保護するために、緩衝地帯が設けられています。



【家光廟大猷院】

三代将軍家光の墓所が家光廟大猷院です。家康を心から尊敬していた家光は、「自分の死後も東照大権現に仕える」との遺言を残しました。現在、国宝となっている大猷院霊廟本殿、相の間、拝殿は、1653（承応2）年に造営されたものです。建物は東照宮の方向を向いており、ここにも家康を慕う心が表れています。



【日光二荒山神社】

霊峰とあがめられた二荒山(男体山)が名前の由来です。勝道上人は辛苦の末に登頂を果たし、二荒山神社のもととなる祠を築きました。山岳信仰の興隆の中で、男体山、女峰山、太郎山の三山の神を大己貴命、田心姫命、味耜高彥根命とみなして三神が祀られるようになり、日光三社権現とも呼ばれました。本社の本殿は二代将軍秀忠が1619（元和5）年に造営・寄進したものです。



日光東照宮

四百年のときを超え ～平和への願い～

徳川家康は、自らの死後、日光の地に小さな堂をつくり、そこに神として祀るようにとの趣旨の遺言を残しました。八州の鎮守となつて世の平安を見守ろうとの思いでした。初めは東照社と名付けられた社殿でしたが、三代将軍家光はこれを絢爛豪華な社殿（現在の東照宮）に造り替え、その後、朝廷より東照宮の宮号が与えられました。

日光東照宮は2015（平成27）年に400年祭を迎えました。東照宮には家康の平和への思いが込められており、彫刻など随所にそれが表現されています。平和への願いはこれからも未来に受け継がれていきます。



260年もの間続いた江戸幕府の礎は家康によって築かれた。家康は死後も日光から平和を見守っている。

5100体を超える精密な彫刻群

【五重塔】（重文）

1650（慶安3）年、若狭（福井県）の小浜藩主、酒井忠勝の寄進によつて最初の五重塔が建立されましたが、1815（文化12）年に火事で焼失し、1818（文政元）年に再建されました。高さは約36メートルあります。内部は吹き抜けになっていて、心柱を四層から鎖で吊り下げ、最下部は礎石から10センチほど浮いている構造です。これは、年を経て木材が縮んだり、重みで屋根が沈んだりしても、心柱が下がることで隙間ができにくい仕組みです。また、心柱を塔身から構造上分離させることで免震の機能をもたせています。こうした日本古来の構造は東京スカイツリーに応用されているといわれています。

一層目の周りには十二支の動物の彫刻があり、その正面の東側には家康、秀忠、家光の干支である寅、卯、辰が並びます。



石鳥居をぐぐり左手にある高さ約36メートルの五重塔。

【神廬・三猿】（重文）

神様に仕える神馬のいる場所が神廬。東照宮の中では唯一の素木造で当時の武家の殿舎に設けられた馬屋の形式になっています。長押（ながし）には、「見ザル」「言わザル」「聞かザル」の彫刻が刻まれています。猿の一生を描きながら、人として歩むべき道を説いています。



神廬の外壁上部には三猿で知られる彫刻が刻まれている。

【三神庫・想像の象】（重文）

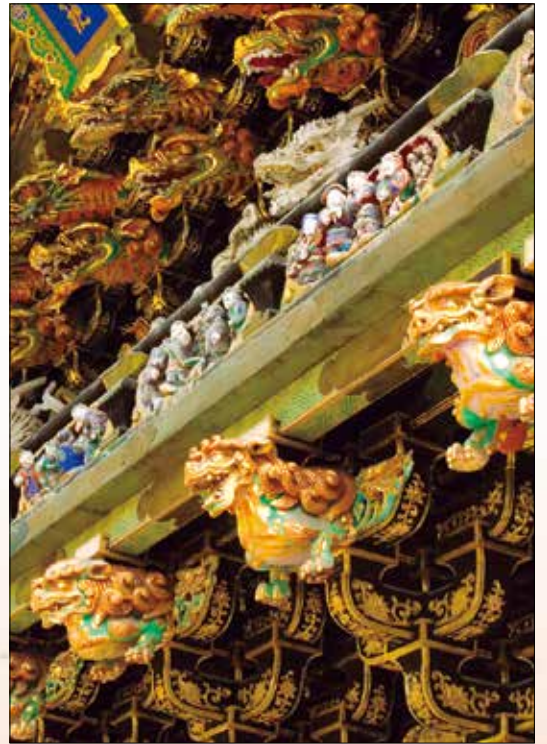
表門を入ると上神庫、中神庫、下神庫の3棟の建物が並んでいます。「校倉造」の外観を模しており、春秋の渡御祭（百物揃千人武者行列）に使われる装束や流鏑馬の武具などが収められています。上神庫の側面には2頭の「象」の彫刻がありますが、狩野探幽が想像で描いたと伝えられており、「想像の象」と呼ばれます。



上神庫に2頭の大きな象の彫刻「想像の象」がある。



春と秋の大祭で行われる「百物揃千人武者行列」。



国宝陽明門近影。彫刻は陽明門だけで500を超える。

【陽明門】(国宝)

日光で最も有名な建築ともいえる陽明門は、1636(寛永13)年に造営されました。江戸時代初期の彫刻、鋳金具(かざりかなぐ)彩色などの工芸、装飾技術がすべて集約されていると言っても過言ではありません。一日中見ても見飽きることがないことから別名「日暮らし門」とも呼ばれ、国宝となっています。

陽明門には500を超える彫刻が刻まれています。麒麟、竜、竜馬、唐獅子などの霊獣と呼ばれる想像上の動物をはじめ、人物や菊、牡丹など、色鮮やかで精密な作品群で埋め尽くされています。

「唐子遊び」と呼ばれる子どもを描いた20の彫刻の中には、腕力のある子が弱い子をいじめたり、それを止めようとしている場面が見られます。鬼ごっこや雪だるま、竹馬などで遊んでいる様子も見取れます。子どもたちがのびのびと暮らせることが平和のあか

しであるとの家康の願いがここに込められているのです。

建物の軸となる柱や梁にも牡丹唐草などの文様の彫刻が施されています。貝殻をすりつぶして作った白い顔料である胡粉を塗った12本の柱には、グリ紋と呼ばれる渦巻き状の地紋が彫られています。門をくぐり終わる左側の柱だけはグリ紋の向きが異なり、「魔除けの逆柱」と呼ばれています。

【唐門・透塀】(国宝)

本社の正門が唐門です。江戸時代には「御目見得(おめみえ)」という将軍に拝謁できる身分以上の幕臣や大名だけが通行できました。今でも正月や大祭など限られた時にしか使いません。この唐門から左右に伸びて本社を囲んでいるのが透塀で総延長は160メートルあり、塀の全体に彫刻が施されています。

唐門と透塀は平成の大修理が終わり、美しい色彩がよみがえりました。

【本殿・石の間・拝殿】(国宝)

本殿、石の間、拝殿が工の字形に配置されている本社は、東照宮の中心となる建物です。神社建築様式の「権現造」の完成形で、国宝になっています。

拝殿の天井には狩野探幽と一門によって、100頭の竜が描かれており、1頭ずつデザインが異なっています。間仕切り戸も探幽の作で、入口から見ると、右に麒麟、左に白沢が描かれています。

神の世界である本殿と人の世界である拝殿は、石の間でつながれています。本殿は東照宮の中でも最も神聖な場所とされています。幣殿(外陣)、内陣、内々陣の3室から成っていて、一番奥の内々陣に神霊が祀られています。本殿の扉の上に並んでいるのは猿の彫刻。猿は鉄や銅を食べ、戦争になるとそれらがなくなつて生きられなくなるかとされます。猿が生きられるのは戦争がない世の中ということの意味し、ここにも平和への願いが込められているのです。

【眠り猫】(国宝)

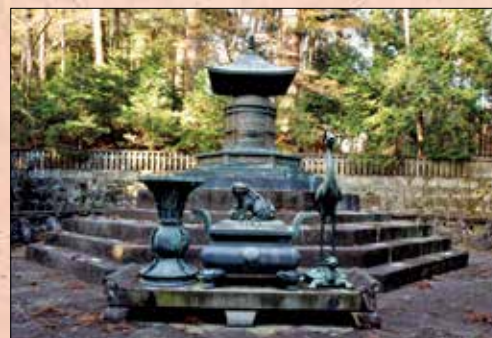
東回廊の奥社参道の入り口にあるのが有名な眠り猫です。左甚五郎の作と伝えられます。真裏には雀の彫刻があり、猫と雀が共存共栄できるほど平和であるとの意味があるともいわれます。



東照宮の数ある彫刻のなかで最も有名な彫刻「眠り猫」。

【奥社宝塔】(重文)

奥社は家康の墓所です。銅鳥居、銅神庫、拝殿、鑄抜門(いぬきもん)、宝塔などがあります。宝塔には家康の神柩(しんきゅう)が



宝塔に納められているのは家康の神柩(しんきゅう)。

東照宮にはこれ以外にも数多くの貴重な建造物があり、全体で5100体を超える彫刻があります。一体一体趣が異なり、それぞれが意味をもっています。先人の英知の結晶といえるでしょう。



陽明門をくぐると正面にある国宝の唐門。



修理を終え美しい色彩を見せる透塀。

日光山輪王寺

神仏が共に刻んだ歴史 いにしえの日光山

輪王寺は日光を開山した勝道上人による四本龍寺を起源としています。後に満願寺の寺号を賜り、日光山の中心的な寺院として発展し、江戸時代に東照宮・大猷院が造営されると、日光山は幕府の尊崇を集めるようになりました。

明治政府の神仏分離令によって混乱しましたが、これ乗り越え、現在に至っています。

【三仏堂（重文）】

日光の三山（男体山、女峰山、太郎山）を御神体とみる山岳信仰との習合により、その本地仏の千手観音（男体山）、阿弥陀如来（女峰山）、馬頭観音（太郎山）が祀られています。慈覚大師円仁が比叡山の根本中堂を模して建立したともいわれています。建物は創建当時は滝尾神社近くにありましたが、鎌倉三代将軍源実朝によって



東日本で最大の木造建築物でもある三仏堂。

現在の東照宮の位置に、さらに東照宮創建によって現在の二荒山神社付近に移り、明治の神仏分離によって今の場所に移築されました。「平成の大修理」により、半解体修理され、荘厳な姿に生まれ変わりました。

【開山堂（重文）】

日光を開いた勝道上人を祀る霊廟です。1720（享保5）年ごろに造営されたもので、重層宝形造、総弁柄朱漆塗の建物です。木造の本尊地藏菩薩、勝道上人座像が安置され、毎年4月1日には開山会法要が営まれています。開山堂の裏に、五輪の塔が立つ勝道上人の墓があります。

輪王寺にはほかにも多数の貴重な建造物があり、見飽きることがありません。



山岳修験道のなごりを残す、強飯式の様子。

家光を祀る霊廟 大猷院

三代将軍家光の霊廟が大猷院です。本殿・相の間・拝殿は、1653（承応2）年に造営されたもので、東照宮と同じ「権現造」です。第一級の技術者の手による江戸時代初期の代表的な建築で、国宝に指定されています。彫刻、漆塗、彩色、鍔金具などの建築装飾に優れており、目立たない部分にもさまざまな技巧が凝らされています。

東照宮が白と金を基調にしているのに対し、大猷院は金と黒を基本としており、金箔も東照宮より赤みがかったものを使用しています。

【本殿・相の間・拝殿（国宝）】

本殿・相の間・拝殿は、連なった建物で、それぞれの部屋の間には仕切りがありません。拝殿から本殿が見通せるようになっています。拝殿は64畳の広さがあり、天井に描かれた140もの竜は、狩野一門の作といわれます。拝殿と本殿を結ぶのが相の間。格天井には鳳凰が描かれ、本殿との境には降竜、昇竜の絵を見ることが出来ます。そして本殿。殿内は金色をふんだんに取り入れたさまざまな彫刻にあふれ、金閣殿とも呼ばれています。

【夜叉門（重文）】

夜叉門は八御門の様式で屋根の前後の軒は唐破風形。牡丹唐草の彫刻で飾られ、「牡丹門」とも呼ばれています。また、柱には胡麻殻の面がとられています。正面左右の間に赤と緑、背面に白と青色の夜叉像が祀られています。

【唐門（重文）】

唐門は中国風の門ということ。唐門の様式で屋根の前後の軒は唐破風形になっています。大猷院の中では一番小さな門ですが、細かい地紋彫の彫刻や透彫の鍔金具など、一面に施された細かく精巧な細工は見事です。

【皇嘉門（重文）】

皇嘉門は非公開の奥の院（家光の墓所）へ通じる入口にある門です。中国・明朝時代の「竜宮造」の建築様式です。「竜宮門」とも呼ばれ、他の門とは印象が異なります。外側は極彩色で彩られ、腰壁は密陀塗という特殊な技法で白色に塗られています。



大猷院本殿 本殿の殿内は金箔をふんだんに使い、様々な彫刻にあふれる。

日光二荒山神社

日光に宿る神秘の力 〈今に伝える〉

日光二荒山神社は、日光の山岳信仰の拠点として古くから崇拜され、特に中世には多数の社殿がつくられました。さらに江戸時代になると徳川幕府によって新しく本殿や社殿が造営されました。

【本殿】(重文)

本殿は1619(元和5)年、二代将軍秀忠が造営寄進したものです。安土桃山様式の美しい八棟造となっています。単層入母屋の反り屋根造で黒漆塗の銅瓦葺き。社殿の正面階段の上に向拝(ひさし)

【拝殿】(重文)

神門をくぐった正面の場所にあります。単層入母屋、反り屋根造で、黒漆塗の銅瓦葺きになっています。総弁柄漆塗で回り縁がついています。拝殿の奥は石段で下りるようになっています。渡り廊下で唐門をくぐって本殿へと続いています。本殿とは異なり、彩色文様や彫刻もなく、単純なつくりながら力強さを感じさせます。

【神橋】(重文)

勝道上人が日光を開山する時に、蛇が化身して橋となり、大谷川を渡ることができたとの伝説が残ります。

神橋は1636(寛永13)年に現在のような朱塗の美しい橋になりました。江戸時代には14回の修理・架け替えが行われています。1902(明治35)年の洪水でも流失し、元の形に再現されました。

【神輿舎】(重文)

拝殿の西側に位置し、拝殿に向って建てられています。1617(元和3)年に東照宮の仮殿の拝殿として建立されたものです。寛永年間に現在の場所に移されました。素木造の簡素なつくりで

【別宮本宮神社】(重文)

大谷川と稲荷川の合流点付近にあり、祭神は味耜高彥根命(あじすきたかひこねのみこと)です。808(大同3)年に創建されたと伝えられ、現在地に移った後も幾度か火災などで焼失し、その後には再建されてきました。本殿は三間社流造で銅瓦葺き。拝殿とともに全体に簡素なたたずまいをみせています。

【別宮滝尾神社】(重文)

二荒山神社本社から北西に約1キロ。うつそうとした山中にあります。本殿、唐門とともに重要文化財に指定されています。祭神は田心姫命(たごりひめのみこと)で、本殿の背面の扉から女峰山を拝す



春を告げる弥生祭、付祭の様子。



簡素なたたずまいをみせる滝尾神社。中央が縁結びの笹。

二荒山神社にはほかに御神木、日枝神社、大國殿など見逃せない場所が数多くあります。

することが出来ます。本殿裏には三本杉の巨木があり、田心姫命が降臨したとされる石柵を巡らせた一角があります。また、子宝が授かるという「子種石」や「縁結びの笹」などもあります。

世界遺産保存

世界遺産を守るためめぬ努力

貴重な日光の文化遺産を後世に伝えていくためには、たゆみない保存・保全の取り組みが必要であることはいうまでもありません。世界遺産に登録された「日光の社寺」の建造物は、江戸時代初期に造営されてから、時代ごとに適切な管理が行われてきました。

山に囲まれ高冷地でもある日光は、これまで何度も自然災害の被害を受けてきましたが、その都度、残された資料に基づいて忠実に修理されてきました。また、雨や湿気が多い気候でもあるため、屋根の修理、彩色の修理、腐食した木部の修理など、計画的にまた不断に修理が行われています。

「日光の社寺」の世界文化遺産登録を目指す段階で、保護活動の重要性は一層高まりました。それま

た、二社一寺などの関係団体が一体となって、国指定史跡実現に向けて取り組むとともに、保存管理計画の策定が進められました。関係者の努力、協力が実り、日光山内50・8ヘクタールが文化財保護法に基づく国指定史跡に指定されました。

ユネスコ世界遺産委員会は、登録に当たって「この環境を維持するために絶えず警戒する必要がある」との意見を特に付け加え、登録後の継続的な保護の大切さを強調しています。策定された「史跡日光山内保存管理計画」では、山内地区を5つの区域に分け、それぞれの区域内の建造物の新增改築、工作物の設置撤去、土地の形状変更、木竹の伐採、発掘調査などについて取り扱いを定めました。現状を変更する場合には、文化庁の許可が必要となっています。

修理を担う保存会

建造物の修理工事などを直接担当しているのは、1970(昭和45)年に設立された「公益財団法人日光社寺文化財保存会」です。二社一寺の国宝や重要文化財の保存修理、調査研究、防災設備の整備・管理を行うことを目的としています。保存会では専門技術をもつ人材を整え、建造物などの保存

修理事業の設計監理・工事施工を行うほか、文化財を守るための防災設備の維持管理、点検・補修の業務も担っています。

文化財建造物の保存は単に傷んだ部分を修理するだけではありません。用いられている技法や材料もしっかりと後世に伝えていく必要があります。このため、保存会は、漆塗、彩色、金具工事などに関する調査・研究を実施し、それらの成果をまとめて資料として残す活動も行っています。

さらに重要なのが、技術をもつ人材の育成です。現在、長い経験をもつ職員のもとで、多くの若い人たちが技術の習得に励んでいます。

文化財保護と文化財建造物や保存修理工事への理解や関心を深めてもらうために、折に触れて修理の現場や修理の作業状況を公開する見学会が開かれています。修復中で見なければ見ることのできないものも多く、貴重な機会となっています。



東照宮中神庫 秀忠公が東照社を創建した当時の建物であることが現校木(あぜき)裏側に残っている柱間の構えや塗装から分かります。それらは修理工事中の調査で明らかになりました。



東照宮中神庫 保存修理竣工後(平成18年度)

④置上(おきあげ)及び箔押し



文様や図様などの輪郭を盛り上げて立体感をもたせ、その上に金箔を押す。

⑤岩下(いわした)、中塗



経綱(うんげん)彩色の中色、岩絵具(天然の鉱石を砕いたもの)下色を着彩する。

⑥岩掛(いわかけ)



仕上げの岩絵具を塗り重ね、金泥にて細部を描き込み仕上げる。

⑦完成



岩絵具、金箔、金泥等により、伝統仕様で極彩色(ごくさいしき)を復原する。

時代ごとに行われてきた修理

【保護活動の歴史】

「日光の社寺」は江戸時代から幕府によって定期的な修理が行われてきました。日光の町には職人集団が常駐し、時代ごとの技術の粋を集めて修理され、最高の状態に保たれていました。

明治時代に入って政府によって神仏分離令が出されました。急速に進む近代化の中で、伝統的な文化財を軽視するような傾向も生まれましたが、日光では、1879(明治12)年、「日光の社寺」を保護する目的で「保見会」が生まれました。全国から浄財を集め修理に充てるなど精力的な活動が行われました。1897(明治30)年に政府は「古社寺保存法」を制定し、文化財保護に取り組み始めます。日光では政府と二社一寺によって「日光社寺修繕事務所」が組織され、社寺の修理を担うようになりました。

その後、1929(昭和4)年に「国宝保存法」、1950(昭和25)年に「文化財保護法」が制定され、「日光の社寺」の建造物の多くが国宝や重要文化財に指定されました。1998(平成10)年には、世界遺産に推薦された山内の地域が国史跡に指定され、面的な保護も行われています。

建造物の修理は、日光社寺文化財保存会(旧日光社寺修繕事務所)が、各所有者から工事を受託して行っています。破損の程度によって、解体・半解体修理を伴う

根本的な修理と、屋根の葺き替え・部分修理・塗装修理などの維持的な修理に分けられます。

「日光の社寺」の修理の特徴は、建物の外部を美しく彩る漆や彩色を、伝統的な材料や技術を用いて定期的に維持修理する作業を続けているところです。

近年行われた修復作業

【東照宮・平成の大修理】

東照宮の建築には、神威の高揚と記念性・永遠性を維持するという思想が貫かれています。漆塗・彩色・鍍金具などの精彩を維持するため、絶え間ない修理が行われてきました。

2013(平成25)年度からはじまり、7力年を掛けて2019(平成31・令和元)年度に終了した「平成の大修理」では、国宝の陽明門や本殿・石の間・拝殿の修理作業が行われました。陽明門



東西透塀・唐門の保存修理竣工(平成23年度)

は2017(平成29)年3月に竣工し、そのきらびやかな輝きを取り戻しました。この期間、2015(平成27)年には「四百年式年大祭」、2016(平成28)年には「御鎮座四百年祭」が盛大に行われました。

【輪王寺・平成の大修理】

輪王寺では、2007(平成19)年度から2020(令和2)年度にわたり、日光山で最も大きい建築物である三仏堂と大猷院霊廟二天門建造物の保存修理が行われました。三仏堂では、オオナガシバンムシ等による虫害が著しく、当初の予定を大幅に超える半解体による大規模な改修が必要となりました。

工事に当たり、雨・風から建物を守るため、同の全体を覆う高さ26mの仮設の屋根を設置し、7階部分から修理の様子を一望できる「天空回廊」が設置され、一般公開されました。



三仏堂の保存修理 素屋根建設・屋根野地解体(平成24年度)



東照宮中神庫 保存修理前

【二荒山神社・神橋の平成修理工事】

平成の修理工事では、1997(平成9)年度から2000(平成12)年度にかけて、木部の修理が施され、2001(平成13)年度から2002(平成14)年度に漆塗、金具の修理が行われました。松材の高欄、橋板、往桁、棧梁、筋違を解体し、橋桁は残す半解体修理となりました。2005(平成17)年に完成した平成の修理工事によってより一層鮮やかな朱塗の橋がよみがえりました。



神橋の保存修理 木部組立(平成12年度)

中神庫の保存作業の流れ

塗装の塗替え修理は最初に破損状況を把握してその原因を探り、最善の対策を修理方針に反映させます。また現状の塗装を良く観察し、修理経過の隠れた痕跡を調査し、過去の見取図と照らし合わせて在来仕様・工法を確認します。また作業経過を描き記した新たな見取図を作製して、次の修理時の参考資料とするのはもちろん、学術資料として、一般にも公開・活用を図ります。

①記録



修理前の現状を記録する。薄い和紙を当て、図様、文様等の詳細を写し取る。

②ケレン



古い塗装を掻き落とし、取り除く。

③見取図調整

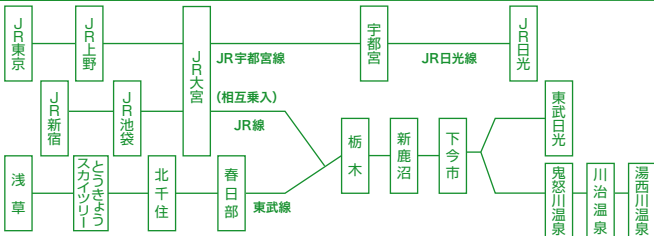


在来塗装の絵具や技法の詳細をよく調べ、本来ある姿の見取図を作画する。

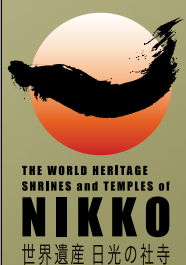
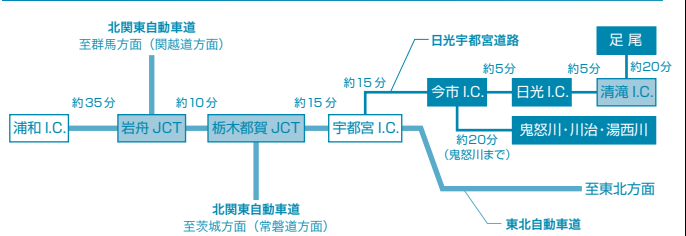
広域地図からのアクセスマップ



電車をご利用の場合



車をご利用の場合



このパンフレットは、世界遺産「日光の社寺」の魅力を発信するために作成したものです。

【発行】栃木県日光市教育委員会事務局 文化財課

〒321-1261 栃木県日光市今市 304-1 Tel: 0288-25-3200 Fax: 0288-25-7334

【作成協力】日光東照宮 日光山輪王寺 日光二荒山神社 公益財団法人日光社寺文化財保存会

無断転載・複製禁止
第二版第一版
2024.00.0050Y